（1） 昭和40年5月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）　　1969年7月11日　第185号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

7月11日
週刊
第185号
編集発行人　佐々木和雄
一部　20円
購読料　30回500円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2―7―6滝沢ビル内電話代表
03（260）2961振替（東京）26110
大阪支局大阪市福島区鷺洲本通り1―16　北村ビル
電話06（458）6597
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128―29（075）（781）0025
名古屋支局052（732）3553

7月17・18日／社学同全国大会（明大記念館・予定）
19日／分割公判粉砕地裁包囲デモ
20日／全国全共闘結成大会（場所、未定）
下旬／入管法粉砕全国統一行動

同盟建設の更なる強化で安保決戦―中央権力闘争 マッセンスト へ

解党主義、無政府主義と闘い
安保闘争を日帝打倒・世界革命戦争へ

共産主義者同盟政治局

全国の同志諸君！

「11月佐藤訪米」阻止―安保決戦にむけて、根底的準備が問われている。

われわれは、秋の安保決戦を、単なる訪米政策阻止闘争としてではなく、「安保闘争を日帝打倒・世界革命戦争へ」鮮明な旗のに、革命闘争として闘い抜く。われわれは、安保決戦を〈2月〉を切り拓く闘いとして位置づける。

われわれは「秋」を闘争の現段階から単色に展望するのではなく〈革命の未来〉から把え返す。それは、一国的視野から安保決戦を把えることではなく、世界革命戦争、〈世界革命の未来〉から「秋」を規定し、革命との連関を明らかにすることである。

ブルジョアジーは、機動隊の物理的人的強化、自衛隊特訓をはじめ破防法の事前適用、事前大量逮捕等々、安保決戦への反革命態勢を急速にうちかためつつある。

今や新らしい時代がはじまろうとしている。いや、われわれの主体的力量をもって、この反革命を突破し、新らしい時代が切り拓かれねばならないのだ。そして、階級闘争のこの新らしい時代は、革命党の時代である。大衆闘争の左翼的戦闘的推進の延長線上に革命的闘争を展望する大衆運動主義者は、新らしい時代において、なによりも敵階級の弾圧を余儀なくされよう。

われわれは、歴史的過渡としての現代過渡期世界の全人民を、次のテーゼをもとに領導する。

〝先進国・後進国・中ソ圏・三ブロックの階級闘争を、世界一国同時革命・世界共産主義の勝利へ〟

そして、この基本テーゼを三ブロックの各階級闘争において、次のごとく具体化する。即ち、

〝帝国主義の侵略・抑圧・反革命と対決し、国際反革命闘争を自国帝国主義打倒・世界革命戦争へ！〟

〝民族解放・社会主義の武装戦列を強化し、国際反帝闘争・世界革命戦争へ！〟

〝スターリン主義打倒・プロレタリア独裁復活をかちとり、世界革命の最前線へ〟

というテーゼをもって具体化し、かかる世界革命戦争の闘いの現在的環として、われわれは、〝安保NATO粉砕、ベトナム革命勝利ワルシャワ条約解体〟を提起する。

かくして、安保闘争は、日本プロレタリアートによって、主体的に次のように指向される。即ち、「安保闘争を日帝打倒・世界革命戦争へ！」

10・8以降、武装闘争をもって70年への道を切り拓いてきた我々は、昨年10・21をもって直接的＝本格的安保闘争に突入し、その闘争形態こそ「中央権力闘争とマッセンストライキ」であり、このラセン的発展とこのラセン性の質を規定、促進するものとしての中央権力闘争を提起した。わが同盟は10・21防衛庁闘争をもって、中央権力闘争を実現させ、東大闘争、全国学園闘争、4・28闘争を通して「中央権力闘争とマッセンストライキ」の実現と両者のラセン的発展を追求し、安保闘争を秋の安保決戦にむけておしあげて来た。

だが、4・28をめぐる階級攻防は、安保決戦にむけての新たな準備・新らしい闘争形態の創出を義務につきつけた。それは、敵の密集した反革命を打ち砕いて中央権力闘争をけん引し抜く独自の〈軍団〉形成の問題であり、中央権力闘争とマッセンストのラセン的発展を革命党が上から独自に領導しぬくための物質力＝〈革命の軍隊〉の問題である。およそ4・28の総括から、このことを導き出しえないものは、4・28敗北から実際には何も学んだことにはならないのだ。

情勢の安保決戦としての煮つまりとこの安保決戦を日帝打倒、世界革命戦争の具体的開始として闘い抜かんとする我々――かかる主・客の措定において、我々は、その闘争形態と質を確定した。だが、革命闘争の時代とは革命、党の時代であり、革命党を基軸にしてこそ展望しえるものである以上革命的闘争における革命党の性格構造、活動形態が、あらかじめ確定されなければならない。われわれが、4・28の総括から導き出した革命党直轄の〈軍団〉の問題とは、実は、かかる問題領域における解答の一つである。

熾烈な階級攻防は、これに打ち克ち革命的大衆をけん引しぬく独自の〈軍事力〉と共に、革命独自の強力で全面的な宣伝煽動力を必要とする。敵階級の全生産手段、交通手段、マスコミ手段を動員駆使しての攻勢をハネ返し権力打倒にむかう階級形成（二重権力・ソビエト）をおし進めていくために革命党の独自活動領域が飛躍的に充実拡大され、且つ、地上・地下の二重構造の形成が行なわれなければならない。そして、これらのることは、「今夏中」というタイムリミットをもってわれわれにつきつけられており、同盟は、このための闘いを、この間、厳しく行なってきた。しかも、この革命党への同盟の飛躍は、秋の安保決戦がまさしく先進国における世界革命戦争の開始をなす闘いであるが故に、これに呼応し、これを全世界におし広げるための国際的党主体形成――世界革命派の結集・革命的インターの結成とこの領導下における世界革命戦争――の闘いが火急をなしている。同盟は、かかる闘いの現在的内容として「戦旗国際版発行をかちとり、八月国際集会への準備を急いでいる。

ところで、四・二八以降、なかんづく、六・九ASPAC闘争以降、同盟が、秋の安保決戦にむけて「安保闘争を日帝打倒・世界革命戦争へ！」というテーマのもとに他の革命的諸左翼にさきがけていち早く推し進めてきた「革命的闘争と革命党の時代」にむけての闘いは、まずなによりも、同盟内に発生した小ブルルンプロ性無政府的傾向と一方における日和見主義的傾向との闘いにほかならなかった。そして、わが同盟は、安保決戦を領導しぬくべき自己の任務に対する責任において、この闘いをやり遂げ、同盟の質的飛躍にむけて第一歩の決定的前進をかちとったことを明らかにしたい。

小ブル・ルンプロ性「左翼」は「10月権力奪取」「臨時革命政府樹立」の旗をもって発生し、「三千名の国会占拠→軍隊出動、国会包囲→大衆決起 占拠戦士と 首都大衆との 結合→臨時革命 政府樹立→安保軍上陸→全人民決起→世界革命戦争」なるシェーマ（「現代革命論」）を提起した。そして、このために同盟は一切をこの「武装三千名」徹底に充てること、これが自称「赤軍派」の組織論であった。

同盟は、まず第一に、彼らの「10月権力奪取」なるものこそは、まさしくマルクスの言う「批判的見地のかわりに独断をおき、唯物論のかわりに観念論をおく。彼らは、現実の諸条件ではなしに、純粋意志を革命の原動力とみなす。」（マルエン選集第四巻、331、傍点マルクス）小ブルの観念論にすぎないこと。「三千名の国会占拠による臨時革命政府樹立」に至っては、ファシストの「二・二六クーデター」にもならないこと。

第二に、そもそも、この「現代革命論」なるものは、大衆闘争の戦闘的推進の単純延長線上に〈革命〉を夢想するというスブスブの大衆運動主義であること、即ち第三に革命的闘争における革命党の位置と役割について位置と役割について、全く理解していないことにも拘らず、その党理論をあえて発見するとするならば、それは、革命党＝「武装三千名の国会占拠突撃隊」なるバブーフ以下的な陰謀組織論にしかすぎないことをあばいた。まことに「彼らからみれば、革命の唯一の条件は、彼らの陰謀組織の成熟である彼らは、革命の錬金術師であり、むかしの錬金術師の固定観念のなかにあった思想的混乱と偏狭性とを完全にわかちもっている。彼らは、革命的奇蹟をおこなうはずの発案に没頭する。すなわち、合理的根拠をもたないからこそ、それだけますます奇蹟的に、意表外に作用すべき珍奇な新機軸、魔術的効果のある破壊機具を。一揆を」（マルエン選集第五巻、194）

同盟は、第四に、自称「赤軍派」なる傾向にみられる党理論の欠如（乃至は、〈党＝突撃隊〉論）は、つまらないところ、自然発生性への拝跪に外ならないことをあばき出した。およそ、この「赤軍派」にあっては、大衆の組織化等階級形成のための党独自の活動領域及び党建設のための活動領域が全くなく、一方における大衆の自然発生性への無条件的期待と他方における〈耳目衝動→さわぐマスコミ→大衆への伝播〉なるブルジョアマスメディアへの全面的依存の甘ったれ「階級形成」以外には何もない。実際、〈国会占拠→軍隊による国会包囲→三〇万の首都大衆決起→安保軍上陸→全国人民決起〉なる「攻防の弁証法」とやらは、悪名高き「政治過程論」＝〈党主体に媒介されない階級形成〉＝〈底なしの自然発生主義〉のゴジラ化にほかならない。そして、第五に同盟は、「武装兵三千による国会占拠」「臨時革命政府樹立」をとなえる自称「赤軍派」の発想が、きわめて気まぐれであることを、この間の厳しい同盟内論争を通して、あばいていった。

彼らはその戦略戦術のデタラメ性非現実性を追及されるや、その度に言を左右し、遂には、「10月権力奪取」をひき下げたり、あるいは、「他党派も一緒についてこなければやめる」「国会のかわりに首相官邸占拠」等々、主張もバラバラになり、その「現代革命論」なるものが厳しい階級攻防に絶望した小ブル切断主義の粉飾物にすぎないことを自己暴露したのであった。

わが同盟は、四・二八以降、先述の通り、「革命的闘争と革命党の時代」にむけて党内論争を組織し党内論争、党内闘争を強めることを通しての党の純化をかちとるレーニン主義を実践した。同盟はこのレーニン主義を通して、純化され、自称「赤軍派」は、日に日に凋落していった。しかもその凋落は、単に「10月権力奪取」論のナンセンスさに依るだけではない彼らは、このマンガ的主張によるだけではなく、その組織活動の無政府性において、革命的同志から次々にヒンシュクを買っていったのである。彼らは組織規律や機関決定を無視しつづけ党内ルールを守らず、これに対する警告も一切無視。それどころか六月に入って彼らは「共産党結成」の別党コースを打ち出し「共産党へブントを解体再編する」組織路線を提起・実践し明白な分派闘争・党派的行動をもって同盟に敵対を開始したそれどころか、更に、その文書活動においても、階級闘争における機密事項について一切配慮せず、その上にも文章の無限定配布によって、まさしく、この間、官憲に情報提供の犯罪を重ねてきたのだ。

自称「赤軍派」のかかる組織無政府性と分派への転落こそは、彼らの本質を端的に示すものでありここにその正体（小ブル・ルンペン左翼）があらわにされるわけだが彼らは、〝勝てば良い〟〝勝てば官軍〟〝先手必勝〟なるブルジョア政治を身につけることにより一層、組織 無政府を強め遂に党内闘争から逃げだし、分派行動に移行したが、その内実は、分派にすらなっていなかった。その凋落の中で、それは、加速度的に強められた。そして、凋落し、且つ分派行動に関する追及を受けた彼らは、あせりあせって遂に七月六日朝、「武装攻撃」を敢行、同盟[illegible]え、しかも、全身打撲・骨折で意識不明・重体の議長（4・28破防法容疑）を「勝つために」官憲にひき渡した。議長は逮捕に血道をあげてきた官憲は議長のひき渡しを受けて大喜び。大共は、破防法容疑で議長を逮捕した。更に、「赤軍派」は、議長に対してのみならず、この「真珠湾攻撃」で多数の同志にリンチを加えた。

だが、かかる「赤軍派」の盲動は、所詮、長続きするものではなかった。同盟員の憤激を買った彼らの盲動は、厚ずぎには、完全に粉砕され、「赤軍派」なるミニ熱帯性低気圧は、（お茶水―和泉―お茶水）を一周して、わずか六時間であえなく壊滅した。しかも、「赤軍派」キャップのIご学生のキャップN等、指導部の同盟の同志にとりおさえられるや今度の言動から一転して全員自己批判の声明。他「赤軍派」メンバーなる者も次々自己批判し、「真珠湾攻撃の三分の一が、逃亡中の「赤軍派指導部との対決を決意した。

全国の同志諸君！

共産主義者同盟は、その内部に小ブル・ルンペン性左翼を発生させたことを深く自己批判する。かかる部分の発生は、同盟が今なお、革命党の条件を備えるに遠い存在であることを示した。だが、そうであるが故に、同盟は、このニケ月、革命党への飛躍を賭けて、自己純化を追求してきた。小ブル・ルンペン性傾向の論理的解体とその組織無政府性に対する断乎たる制裁は、その第一歩の成果としてかちとったものであることを全階級戦線に報告する。革命闘争の新らしい時代にむけて自己純化を行なったわが同盟は、これを正しくなしとげたことによって安保決戦の最前衛の水準と地歩を確保したことを自負する。同盟は、更に火急に、革命党そのものに自らを高めることによって、「安保闘争を日帝打倒・世界革命戦争へ」秋の安保決戦を領導しぬくであろう。

七月九日

八月第二回国際会議をかちとれ
世界党建設の礎とせよ

日本帝国主義の死活を賭けたアジア侵略を全面化するアジア反革命日米帝国主義同盟の再編強化である七〇年安保をめぐる階級闘争は、十一月佐藤訪米に向ってますます煮つまってきつつある。

七〇年安保闘争の決戦をなすべき十一月佐藤訪米阻止闘争を、日帝打倒、プロレタリア独裁樹立の権力闘争として、また、七〇年代世界革命戦争の突破口としてプロレタリア人民の武装の質的飛躍を切り開いてゆかねばならない

同時に、我々は現代帝国主義の危機の支配形態なし崩しファシズムを粉砕する帝国主義諸国プロレタリアートの闘争と、後進国革命戦争及び過渡期社会の階級闘争を世界へ領導する世界前衛、第五インターの形成を我が同盟が軸になって世界的に開始してゆかねばならない。

昨年につづく本年八月に準備される第二回国際会議は、以上の二点を前進させる点で決定的意義を持つものである。

①昨年の「国際反戦会議」

帝国主義諸列強の不均等発展に基く市場再分割戦の激化、帝国主義の侵略に対する後進国民族解放闘争の世界的発展、帝国主義の国内再編と対決する国際ベトナム反戦闘争を突破口とする先進国プロレタリアの階級闘争の昂揚、「社会主義」圏における経済的、社会政治矛盾の拡大と帝国主義の反革命の脅威に抗く階級闘争の共同化

六〇年代後半は帝国主義世界の危機の成熟と階級闘争の世界的昂揚を示すものであった。

この情勢を、我々は帝国主義の危機、「世界革命の第四の波」の時代として把え、主体的にプロレタリア世界革命を実現すべく、プロレタリア階級の最も意識的部分である前衛党がその指導を問われている、と考えてきた。我が同盟は、第七回大会で、世界同時革命戦略をもって、その課題に応え、国際部の発足と昨年の、米、仏の革命組織の代表を結集した第一回国際反戦会議を組織したのである

この会議は、世界プロレタリアと前衛の主体的弱さと、我々日本プロレタリアのそれが世界同時革命の実現を担うには巨大な前進を遂げなければならないことを、内容的にも技術的にも、我々の前に明らかにした。しかし、この会議は、ベトナム革命戦争やチェゲバラのラテンアメリカの革命戦争に先進国プロレタリア人民が応えるべく革命的闘争を追求していた諸組織を結集し、直面する課題と世界革命に向けた戦略的課題を追求する初めての機会であった

会議は、ベトナムを中心とする民族解放革命戦争に呼応し、国際反戦闘争を先進国プロレタリアートが、自国帝国主義打倒、そして過渡期世界の帝国主義間の反革命同盟＝NATO、安保粉砕の戦略的課題に発展させることを決議に表現したのである。

会議は、帝国主義の侵略と反革命の激化に伴う民族主義、排外主義攻撃に、世界プロレタリアートの団結を表現する国際主義は、自国帝国主義の戦略的課題を宣伝し組織することである、と結論したのであった。

同時に、十月国際反戦統一行動を決定し、具体的闘争の統一を追求した。そし、我々は昨年10・21国際反戦統一行動を自国帝国主義打倒の戦略的課題に応える、中央権力闘争として防衛庁占拠闘争を組織した。

我々はこの会議を以上の重要な意義を持ったものであると考えるが、総括すべき弱点も存在したそれは、その後の階級闘争の意識的指導に基く理論的前進によって明らかにされたものである。

②昨年八月以降の前進と世界戦略、戦術、組織

去年の10・21防衛庁占拠闘争は67年10・8羽田闘争が突破した武装闘争の質の最高の発展を実現した中央権力闘争としてあったが、つづく11・7首相官邸占拠闘争は権力の弾圧の質的飛躍によって完全に粉砕される。一月東大安田攻防戦とその全国学園闘争への拡大一方、地区反戦を軸とした階級的労働運動の発展は、現代革命における労働者権力の組織、ソビエトの萌芽形態を実現すると共に革命の型、中央権力闘争（蜂起）マッセンストライキ（ソビエト）と、党の課題、革命の軍の組織任務を明らかにしていった。

同時に理論的にも、世界同時革命戦略は、過渡期世界の帝国主義[illegible]結着は帝国主義戦争や恐慌といった帝国主義の自然的危機として到来するのではなく、そのプロレタリアートの敗北が前者を、プロレタリアートの革命が後者を世界的においし広げる型、すなわち「前段階決戦」へと発展させられた。

従って、世界革命は先進国プロレタリアートの武装蜂起と後進国の革命戦争、過渡期社会の階級闘争の結合による帝国主義同盟の反革命戦争との世界革命戦争であることを明らかにしたのである。

一方、先進国革命諸派は権力の攻撃と既成「共産党」の日和見主義、排外主義への[illegible]の下で新たに前衛党建設への闘争を組織の分解、再編の中で推進しているが、党形成を開始したが[illegible]故に、未だ明確な戦略と組織を獲得していない。このことは昨年の会議の討論や各国の論争と分裂の中に明らかに示されている。

フランス五月革命の敗北、ドイツSDS分裂、アメリカのSNCCの分解とBPPの拡大と武装闘争の発展、そしてSDSのPL派とNEW LEFT間での分裂これらの現象は先進国革命の戦略戦術、党組織の問題を根本的に応えきれないでいる各国革命潮流の現状を、示すものである。

我が同盟は、この間のような各国状況を踏え、国際機関紙「THE・SENKI」を通して戦略戦術、組織方針の論争を開始し、日和見主義、修正主義（ブ連派）と一国社会主義論、人民戦線派、そしてサンジカリズム等に世界的党派闘争を進めて来た。

同時に、世界革命戦争を領導する各国革命組織の戦略、戦術の形成そしてそれを通した世界的インター建設に向けて、BUND在外支部の組織の為に海外オルグの派遣の準備を全同盟一丸となって取り組[illegible]

③第二回国際会議の任務と性格

今年の国際会議は、現代帝国主義の把握を基に世界革命戦略の論争とその意志一致に基くBUND在外支部建設の突破口として位置づけなければならない。世界革命戦争の要を担う先進国プロレタリアートの蜂起を指導すべき世界各国の前衛の建設と十一月佐藤訪米阻止の武装闘争、権力闘争への飛躍を世界戦略の強固な国際的、そして同盟全体の意志一致を八月国際会議を組織する過程で完遂することが、国際会議の中心課題である。

同盟国際部は世界各国の革命派の組織、個人二十数通の招請状を発送すると共に、THE・SENKINO・5で論争の準備を提出している。

同盟全体が八月国際会議を組織する中で、戦略論争を組織的に深化し、同盟の組織の質的飛躍を実現し、十一月安保決戦を突破口と[illegible]〇年代[illegible]戦争を指導[illegible]す前衛党に発展してゆかねばならない。

帝国主義権力と革命組織との攻防戦の激化は、国際会議の性格を規定している。すなわち帝国主義列強はプロレタリアートの国際的団結が最も根本的な挑戦である故に、革命派の国際会議を非合法に追いこむ。我々は非合法に耐える組織体制を築くことによって、この攻撃を無意ならしめ、自らを強めていくであろう。

我には、この会議を成功させることによって、世界革命戦争を通した世界同時革命を指導する世界各国のBUNDを形成し、それが軸となった国際反帝統一戦線の形成とそれによる帝国主義のなし崩しファシズムに対決する世界的武装闘争の開始を十一月安保決戦を日本でそのような質で組織することを契機に、実現し、プロレタリア国際主義の巨大な前進をかちとることができるのである。

既に、第二回国際会議の国際実行委の準備会が予定されている。戦略論争の深化をもって八月国際会議を成功させよ！

さらぎ議長破防法不当逮捕
破防法攻撃を粉砕し安保決戦へ

日本帝国主義の侵略・反革命・抑圧の強化は、権力政体の再編をもたらした。それが、佐藤帝国主義なしくずしファシズム政府の性格であり、破防法適用、大学治安立法、自衛隊・警察の強化、一連の合理化計画の非妥協的推進を通して、「安保粉砕・日帝打倒＝プロ独樹立」を目指して決起している広汎な労・学・農・市民との政治的対決を今秋安保決戦へ向けて一層強化している。とりわけ、わが同盟を先頭とした革命的左翼と共進的大衆との分断＝革命的左翼の非合法化が執拗に追求され、破防法攻撃が今一段と強められようとしているのである。

かかる階級闘争の決定的な局面にあって、わが同盟内の一部の諸君は、破防法容疑で逮捕状が出ていた同盟さらぎ議長をいかに弁解しようとも、官憲に売り渡すという許すべからざる反階級的行為をしでかしたのである。かかる事態を防ぎえなかったことに対して、同盟は全階級戦線に対して自己批判するとともに、権力のいかなる弾圧にも屈せず、今秋安保決戦から七〇年―七〇年代階級闘争の最先端に立ってプロ独樹立、世界革命の完遂へ向けて闘い抜くことを明らかにする。

なお、七月一日、東大闘争等で令状逮捕された久保井全学連副委員長も、さらぎ議長が不当逮捕されることによって破防法第四〇条容疑に切りかえられ、数名の同志への官憲の追求も一層強化されている。

わが同盟は、日帝打倒＝プロ独樹立、世界革命戦争＝世界革命の完遂を全世界プロレタリアートとともに獲得する理論と組織を今秋安保決戦の闘いの過程で飛躍的にわがものとする同盟建設を推進し、破防法、いな、それ以上の弾圧をもはねかえして、闘い抜くことを宣言する。

共産主義者同盟パンフ
4・28安保沖縄闘争
発売中　一五〇円
千代田区三崎町二―七―六　滝沢ビル
戦旗社

世界暴力革命論
共産主義者同盟議長　さらぎ徳二著
目次
第一篇　方法論
―批判序説―プラン・宇野三段階論の止揚―
第二篇　普遍本質論
第一章「資本論」の原理的展開
第二章「宇野原理論」批判
第三章　梯＝ヘーゲル哲学と「資本論」＝評註
第四章　帝国主義崩壊の原理
―論理的移行と原理―
第三篇　史的戦略基底論
第一章　マルクスの世界同時革命と永続革命論
―帝国主義への史的段階移行と世界戦略―
第二章　過渡期世界の世界同時革命
―三ブロック階級闘争・世界革命戦争―
第三章　過渡期社会と世界プロ独
―対島忠行、T・クリフ批判・チェコ・文革―
第四篇　革命軍事戦略論序説
ブランキ・マルクス・レーニン・トロツキー・毛沢東・徳田球一・10・8―10・21―東大闘争
A5　P三〇〇　¥800
リベラシオン社　振替　東京一〇六二三四

日大 農獣医学部 再封鎖かちとる
右翼を撃退し、日大闘争の最先端へ

【日大分局】六八年日大闘争は全国学園闘争の質を堅持して闘いぬき、帝国主義の一角を切りくずし、七〇年安保粉砕への破竹の進撃を開始した事を知らせた。日大闘争―エンタープライズ阻止闘争―王子闘争―成田闘争で展開した実力闘争を堅持し闘いぬいてきた。しかし六九年一月東大安田解放講堂の攻防戦と神田カルチェラタン闘争以後、政府ブルジョアジーは日大闘争に対し各学部を粉砕し、バリケードを撤去し、農獣医学部には去る二月一〇日大学当局教授会と国家権力が一体となってバリケードを撤去していた。

しかし、その後徹底した原則的活動を展開する中、五月ぶりに日大闘争の再度の高揚期を切り開き、七月二日、中教審・大学立法＝帝国主義大学再編粉砕の政治課題を前に押し出し、日大闘争勝利、古田体制打倒、9項目完全獲得のスローガンの下、無期限バリケードストライキを圧倒的大衆の力でもって突入し、日大全共闘の最先頭を切って再封鎖闘争に突入した。このことは、現在闘争圧殺を受けている文理、郡山、経済、芸術学部などの学部に対して、闘争の再生を喚起した。日大全共闘各学部が一方的に授業再開され闘争の政治焦点を見失なっている情況の中で農獣医学部において、中教審・大学立法の政治課題に対して、日大闘争の方向と再封鎖闘争の意義と問題を鋭く提起した。

農獣医学部の闘いに対し、学部当局教授会は一見民主的ベールをかぶり「授業再開する中で民主化する」と言う論理でもって、闘争委と一般学生の戦線を分断し、闘争圧殺を行なっていったがしかし、教授会そのものの内部に於て、我々からの鋭い追求を受ける中で、分解・動揺し、全ての問題点を隠蔽し大衆を欺瞞していた「授業再開する中で民主化」の論理でのものが破産し、学生の前から姿をくらました。

我々は4・28沖縄闘争、6・15安保粉砕統一行動、6・27全都全共闘の中教審、大学立法粉砕統一行動に大衆動員を克ちとり、しかも大衆に対し、だいたんに問題を提起し、我が学部において、6月23日、24日の政治集会と決起集会を提起したけれども、教授会は、その闘いに対し、学部ロックアウト策動を行ない、学生戦線の分断をはかってきた。しかし、我々は7月2日学部教授会に最終団交をつきつけ、再バリケード封鎖に突入した。これに対し、右翼関東軍は圧倒的大衆の力で築いたバリケードに対し、3日深夜投石や火焔ビンや鉄パイプを投げ込みバリケード破壊を行なってきたが、我々はバリケードにたてこもり関東軍のバリケードを死守した。

3日早朝、学部教授会は背後に六〇〇の機動隊をたてに退去命令を出してきた。我々は残念ながらもバリケードを出たが、4日再度本部をバリケードでもって、封鎖貫徹した。

社会主義学生同盟全国委員会アピール

全ゆる解党主義的傾向を排し同盟のボリシェビキ的強化を

全都全国の同志諸君！学友諸君！そして闘うすべての労働者諸君！この間の日本階級闘争の発展とそこに於る階級的激動は一切の党派に革命的試練を課し、同時に自己が真の安保粉砕―日帝打倒を目指しうるか否かの組織的鍛錬を与えたのであった。この中にあってこうした「シェトルム・ウント・ドランク」の時代を真に同盟のボリシェヴィキ的強化＝プロレタリア党建設へ向けて邁進するのではなくして、一切の同盟機能を事実上解体させ、「単純軍事力主」主義へ偏向するという否定的傾向が極く一部分ではあるが同盟内に発生した。

彼ら自称「赤軍派」の主張なるものはそれとして充分批判され、粉砕されねばならないが、現在の彼らの存在は同盟はもとより、階級戦線一切に敵対する反動的役割以外の何者をも演じていない。即ち、学生戦線に限って言うなら、中央学生組織委員会、社学同全国委員会のほんの少数にしか過ぎない「解党主義者」どもの、無原則＝反階級的行為を許すことなく同盟の質的飛躍をかちとらなければならない。またかかる一部の腐敗分子に指導され煽動された極めて先進的にして且つ有能な同志諸君！諸君の一時的な同盟機関―支部活動の中絶は充分総括されねばならぬにせよ我々は諸君の戦線への即時復帰を拒否するものではない。直ちに自己点検を開始し、全国委員会指導の下に復帰せよ！

全都全国の全ての闘う同志諸君！ 同盟は健在である。同盟は闘っている。そして我が全国委員会はその最先端でかかる解党主義的傾向との絶えざる斗闘を貫徹している。ブルジョア権力がいかにマスコミを通したデマゴギーを流布しても、十余年に渡る社会主義学生同盟は盤石のものなのだ。更に、ありとあらゆる小ブル的俗物根性をまるだしにして、何か同盟が危機的状況に陥いったなどとキャンペーンする「たわけ者」（中核しかり、革マル、MLしかり）の策動を排し、今秋十・二一―訪米阻止中央権力闘争を世界革命戦争への展望を切り開くものとして闘い抜くであろう。社学同はいつになく消耗さと確信を以て世界＝一国同時革命をきりひらくであろう。

全都全国の同志諸君、学友諸君、そして全ての労働者諸君、社学同全国委員会の下に結集し、密集した闘いを以て権力の破防法攻撃をはねかえそうではないか。

世界＝一国同時革命万才！暴力革命万才！
プロレタリア独裁万才！
万国の労働者団結せよ!!

世界同時革命をきりひらくために（4）

安保―アジア階級闘争の高揚と南朝鮮改憲阻止闘争の奔流

共産主義者同盟国際部

南朝鮮学生の革命的決起

六〇年の「四・一九学生革命」の中心的拠点となったソウル市内の各大学は久しく鳴りを静めていた。しかし、六九年六月十二日のソウル大学生約五〇〇名による日常的弾圧体制下で強行された「三選改憲反対声討集会」を起点として、その革命的伝統を再び歴史に登場させた南朝鮮学生は、ソウル大学（文理・七）高麗大、延世大、京畿大、慶北大……において連日非合法集会が戦い取られ、三選改憲絶対阻止の決意を南朝鮮全人民の前に表明して来た。そしてついに六月二十七日、集会終えた高麗大学生約一〇〇〇名は街頭に進出し五〇〇メートルのデモを敢行。そこで官憲と激突し、数人の重傷者と逮捕者を出すに至った。

この日の高麗大学生の英雄的闘いによって、朴軍事政権と先進的学生の対立の非和解性は人民大衆の目の前に鮮明にされ、南朝鮮全土に亘る、高校生を大衆に含んだ学生の、革命的決起を呼び起したのである。ソウルを中心に、連日の戦闘的デモンストレーションが組まれ、官憲の狂暴な弾圧は、日増しに決起の枠を学生から諸階層へと押し拡げ、また朴三選の反動性、反革命の緊急性の度合を暴露している。こういった闘いの中で「四・一九学生革命」の中心的な戦闘部隊であった延世大学生は、果敢な血みどろの戦闘を続け、七月二日には、大学付近の国鉄の駅と線路を占拠し、投石によって官憲に対し攻勢に出るといったような局面を現出させている。

この延世大学生の街頭デモ→校舎占拠→地区拠点突入占拠へと展開する闘争は、今や、全国学生に引き継がれ、南朝鮮全人民の大衆決起を領導し抜くべきその巨大な革命的力量を着々と蓄積しつつある。そして、彼らの闘いは、新民党及びインテリ層を中心に、上から準備されてきた「三選改憲反対派国民闘争委員会」の一揆的な発足を促し、同時に、彼ら革命的学生は、この多様なイデオロギー的傾向を持った統一戦線全体のヘゲモニーを獲得しつつある。

それだけに、朴政権当局は、学生弾圧に狂奔し、学園査察の一層の強化、あるいは「夏期休暇学生指導方針」なるものの提出によって、今秋までに、学生の政治活動を全面的に圧殺することを計っている。しかし「四・一九学生革命」の不十分性を総括し、長い雌伏期間を経た革命的学生の新たな革命理論組織とエネルギーは、必ずや今秋から冬にかけての、朴との全面的対決に際し、南朝鮮人民を領導し、朴永久政権の野望を粉砕し、全アジア規模で展開される革命戦争の最も重要な戦線の一端を我々と共に担って行くであろう。

学生の爆発的決起の歴史的背景

六〇年以来の、このような南朝鮮学生の再度の革命的決起を、普遍的に規定しているのは、全世界規模での階級危機の深化と階級闘争の高揚であり、特殊的には、その最も密集せる場所としての朝鮮半島の地理的歴史的条件である。

過渡期世界の矛盾の集約点とも言える南朝鮮において革命運動がこのような形態で一挙的に政治過程に登場したのは、一つには朴政権の反共法等による革命運動の戒厳令的弾圧であり、それによる実力闘争の絶対的困難性、そして全日成の統一運動を一方からの勝共統一運動によるイデオロギー的複雑性の故に、秘密結社などを通じ個別分散的、内面的に反帝闘争、共産主義運動が展開され準備されて来たことに帰因する。

すなわち、六〇年の南朝鮮人民の革命的決起が獲得した李承晩反革命独裁政権打倒の成果を、軍人朴正煕は翌年五月の軍事クーデターによって簒奪し、以降、韓日条約締結、反共法制定、韓国軍のベトナム派遣といった人民に対する再三の裏切りと国内外に亘るファショ的反革命を強行して来た。殊に学生に対しては、その「四・一九学生革命」の伝統を根絶やすべく、徹底した大学管理や、ROTC（韓国陸軍特別幹部候補生として軍の特殊訓練を受けている学生）の組織的活用といったCIA並みの反革命予防弾圧を行なって来たのである。

そして現在に至って、朴は深まりゆく経済危機を基底とした国内政治体制動揺の進行を国内経済の手直しによっては収約し切れぬことを敏感に嗅ぎ取り、ファッショ的行政権力を一層強化し、この危機的矛盾を強圧的に隠蔽すべく現行憲法の大統領三選禁止条項を削除し、朴三選＝朴永久政権として朴ファシズム国家の確立を画策し始めた。さらに七十一年の米軍スエズ以東撤退およびその年に予想される国内政治危機の爆発的発現は、ASPAC、日韓経済合同委等に見られるごとく、日帝権力との結合を強化し、国内には与党共和党内の金鍾泌一派の議出、野党大物の政治結社の暴力的摘発……といった血迷ったファショ的政治を展開し、南朝鮮人民学生の巨大な反撃を引き起したのである。

朴政権打倒とアジア反帝統一戦線

現在、日本では帝国主義的排外立法「出入国管理令」粉砕闘争がわが同盟を中心とする日本反帝統一戦線によって担われており、それは在日朝鮮人民諸組織（朝総連民団、韓民自統など）の中に政治的流動化を惹き起している。在日中国人の中で、内政不干渉主義を突破し、プロレタリア国際主義の旗を掲げて反帝統一戦線に結集した「在日華僑青年闘争委員会」の一団に見られるように、在日朝鮮人の中からも、アジア反帝統一戦線の建設に向けて結集する部分が登場して来ている。すなわち、単に戦線戦術部隊を形成して行くと同時に、世界革命戦争―各国中央権力闘争を担う戦略部隊をも担って行こうとする部分である。

入管闘争を媒介に登場した在日外国人の闘争は、現在法案粉砕阻止に向けてハンストという極限的な手段を以って続行されている一方、現行令下の弾圧を粉砕すべく、入管令執行阻止、大村収容所を初めとする強圧基地粉砕の闘いが我々の側で、着々と準備されている。今月下旬に予定されている入管法案実力粉砕闘争において我々の最大限結集を戦い取り、この闘争を勝利的に打ち抜く中から、アジア反帝統一戦線の巨大な建設の礎石を打ち固め、その中から特殊に弾圧のかかる在日外国人革命派の運動を保証する戦術部隊を形成し、南朝鮮革命運動との具体的結合と同時的蜂起と世界革命戦争を推進し抜く、世界赤軍極東部隊の準備を急がなくてはならない。

アメリカ階級闘争

新たな政治闘争の再生へ

本紙前号、国際部論文で明らかにされたように、今、アメリカ階級闘争は、巨大な転換を開始し、革命的党派の深刻な革命党建設へ向けての論争が展開されている。国際部に米新左翼活動家からの論文が届いたので、翻訳、掲載する。

アメリカの急進党派は世界革命に向けての闘いにおいて最近新たな地平に到達した。しかしながら昨年度の政治活動においてなされた巨大な前進にもかかわらずその指針と進展についてはいまだ明らかでない。

先日も我々はブラック・パンサーの劇的、偶像的なカーマイケルの辞職と同様にアメリカにおけるもっとも活動的な学生組織であったSDSの崩壊を見ることとなった。それは後退とさらに困難な状勢の招来を意味するものとしてのみ映るにちがいない。しかし、これらの事件は様々な方法で米国内外における米帝との永続闘争を成功裏に遂行する新たな組織を生みだしたということに他ならないのである。

今日の米国における政治の流動的状況を理解するために昨年度活動についての短い記事を送ることは必要な事であろう。米帝に関する問題についての最近の傾向のほとんどは知られていない。

黒人運動の故にアメリカ急進党派の焦点であるブラック・パンサー党はその国家的帝国主義の自己正当化的見解からアメリカにおいて組織的に存在する社会制度を試練し、くつがえす傾向をもった新しい見解へと変った。この変換のもっとも痛烈な実例はアイヴィの神聖な洞窟すなわち大学においてあらわれた。

しかしながら、ベトナム戦争に関連して大学を関係させる戦争に関して広汎に広がった大学における運動はアメリカにおける人民の少数派換言すれば白人有産階級以外の危機として最も劇的に巻き起った。ここで分散しているように見えるほど四千万人のアメリカの黒人、インディアン、東洋人の団結について思い返すことは決定的である。それらは同じ植民地時代の病いに苦しめられており、平等と自由の新たな世界を作るための全ゆる真の試みを今日苦しんでいる人々である。

昨年のアメリカにおける政治闘争の前衛にあるのはサンフランシスコ州立大学において発生した闘いである。

この大学における真の階級闘争が激発する以前にSDSとその他の地方左翼的白人グループはベトナム戦争に対して義憤と怒りをぶつける運動を作るための努力を続けていた。

いわゆる戦争機械としての大学の関与、キャンパスにおける軍隊そして戦争ご関連する問題は無関心と嫌悪によって繰り返し受け取められた。

いかなるやりかたでもこれらの事実は毎日学校に行ったり帰ったりする学生の大多数の日常的生活に直接に影響することはなかった

しかしながら黒人学生組合と一種の自由な第三世界を組織する組織によって運動が開始された。

ほとんど、黒人労働者階級の黒人学生によって形成されたこの組織はこの教育制度において日々行なわれている人種差別を批判し攻撃した。サンフランシスコ大学を三カ年間以上も閉鎖するということをすべての学生運動が準備し引き起したことを誰も真にこの時理解できた。

学生の抗議によって研究施設が活動を中断せざるを得なかったということはアメリカにおいて最初の事であった。

時が経過するにつれてストライキ事件はますます圧倒的になった早川総長の任命と機動隊構内の常駐によって。

ついには職員のさらに急進的な部分が彼等独自の手段によってすなわち彼等の生活改善のために時々試みていた教員組合機能遂行を放棄するという手段を登場させることによってこの闘争と結合することになった。

彼らの合流は決して過大評価してはならない。

この闘争を通じて新たな局面が現れた。はじめて白人中産階級の急進派およびその同調者がこれまでよく見られた干渉主義的な態度ではない指導性を発揮した。この時に戦略と戦術を決定していたのは都市黒人と南部黒人であった。

急進的白人が論争において闘争のための新たな思想を学び適用することに忍耐強く従いながら行った彼等自身の闘いであった。

闘争の数週間後に一種の陳腐感が生じた。これは予想されていたものに他ならない。しかしながらこの闘いとその発生はすぐに継続するその他の多くの闘いのための政治化状況と出発点を結果的に導いた。とりわけ重要なのはこの闘いの余波としてアメリカ現代左翼史においてはじめて急進主義に合流して州権力に対決する労働者が出現した事であった。

さらにサンフランシスコ州からほんの20マイル離れたところにある世界で最も富裕な会社の1つスタンダード製油の労働者が経営者と労働争議においてするどく戦ったという事態が起きた。労働者の要求をはぐらかす試みを幾度か繰り返した後にスタンダードオイルの経営者はリッチモンド市の官僚と結合して地方警察を用いて黒人にしばしば経験させた同じ弾圧を急進的白人に向けた。急速に左翼と労働者両方の主張の結合によって新たな連合ができ上った。

この闘争にはしかしながらさらに価値ある注意を向けねばならない。

いまや労働者と学生は不満足な要求はなにもかもむさぼるために結合して州権力と闘っている

黒人解放運動の構成員の間にも多くの抗争が発生している。

これらの抗争の本質と結果を今詳細に記述することは難しい。

しかしながらもっとも満足すべき事実は＜国際主義に対応する民族主義＞が正しく理解され白人急進派との連合が生れたことである。

実際にブラックパンサーの二人のメンバーがU・C・L（大学）で学生会議に参加している時に射殺された

黒人民族主義グループの多くは不誠実であり非常に劣悪な種類の挑発主義であると疑われる。

しかし、彼らの政治的に純化した展望の遂行を誠実に行なおうとしている幾つかの部分も見受けられる。

そしてブラックパンサーとその同調者がアメリカの政治運動において急速に上昇している新たな黒人の指導権を圧倒的な支持を獲ちとったということは疑い得ない。

しかしながら、黒人闘争と学生運動は、今深刻な危機に直面している。それは、明確に解決不能なものではない。実際には、それは自己批判とこれまで欠落していた新たな路線の周囲に大衆を再組織するための基礎を提供するだろう抑圧が日に拡大し、ファシズムがその醜い過程を開始する中で、アメリカの左翼は混沌の海の中をもがきながら前進している。ブラックパンサーでさえこの混乱と無関係ではない。しかし、このアメリカ人にとって独特のものに見えるものの中に、一つの成果が存在する。政治的発展の過程を通して、これまで正統的に組織された政治党派に嫌気を感じていた非常に沢山の活動家グループが登場してきている。この広汎な現象の故に、将来の政治活動の為の責任と指導を引き受ける準備ができている米国社会の巨大な源泉を残している。

この新たな部隊とより適切な政治組織の研究を統合することによって、アメリカの左翼の再生と飛躍がまもなく起ころうとしているように思える。

多くの道を通ってアメリカで起っている現在の事態は、全世界の左翼政治活動と伝統的に関わる階級課題への現実的復帰への不可欠の一歩である。

（完）

（アメリカ新左翼活動家）G・C氏

階級形成論と党組織論

階級形成論としてのソビエト運動論（序）（上）

榎原　均

＜はじめに＞

わが同盟の組織論レベルのスローガンとして、ソビエト運動論が提起され、その内容規定が、工場細胞の血のにじむような実践活動によって豊富化されてきた。だがわれわれが、今秋に、マッセンストを闘いぬく準備を進めようとする時、ソビエト運動論の一層の綿密な内容規定を要求される。

従来の確認点は大まかにいってソビエトは労働者階級の政治権力であり、従って権力闘争の勝利がソビエト形成の根本的問題であることを前提とし、過去において激動期に自然発生的に形成されたソビエト型組織は今日では平時から出現することである。そしてこのソビエト型組織の運動の質を現段階において内包しているものが反帝統一戦線と階級的労働運動であり、これらは、中央権力闘争とマッセンストという戦術に導かれてソビエトを実現するということであった。

だがこのような確認においては客観主義的側面があったということである。

即ち、ソビエト運動論を、党との関連をぬきに一般的見通しとして設定しているが故に今日直面している課題には応えることができないということである。それは、実践の場にひきだされるや、直ちに中央権力闘争とマッセンストとの関係はどうか、マッセンストとソビエトの関係は、党とソビエト運動の関係は、といった幾多の問題に直面する。

しかし、だからといってソビエト運動論を切すて、否定することは誤りである。われわれが提起したソビエト運動論の中心に現代革命論の核心的なものの一つが存在しているのであり、この内容の一つにおいても、われわれは革命的左翼諸党派の中での指導的潮流として存在しているのである。

にもかかわらず、われわれの現段階での内容規定であれば、そこにソビエト運動自体に満足し、ソビエト運動の中に党を解消させる傾向を不断に生み出す。その一つの表れが、同盟内部における「中央権力闘争かマッセンストか」という論争である。

そしてこの論争を止揚する道は一般的にソビエト運動論を豊富化することにあるのではない。必要なことはソビエト運動論の豊富化を党的立場から行ない、そのことによって、党を豊富化することである。

＜ソビエト運動論の領域＞

では、われわれが、従来提起してきた内容はいかなるものであったか。

われわれの暗黙の前提に、党の組織論としてのソビエト運動論という規定があった。だが、これは間違っている。ソビエト運動論は正確には階級形成論の内容である。階級形成論とはプロレタリア大衆がどのような組織を形成しつつ、どのような筋道を通って自らを支配階級（国家）へと組織していくかを明きらかにすることである。だから階級形成論はプロレタリアートの組織の形態を明きらかにすることができる。けれども階級形成論によってはプロレタリアートの組織形態を「闘いとる」ことはできない。これを闘いとるものは「党」であるが、階級形成論は「党」の内容を明きらかにすることができない。従ってプロレタリアートの現実の階級形成は、階級形成論を媒介した党によって成し遂げられるのであり、階級形成論は党組織論の中に止揚されなければならないのである。

ソビエトは労働者階級の政治権力である。だがそれは同時に、諸党派の統一戦線である。ソビエトは諸党派が参加し、そこでは権力問題をめぐっての党派闘争が展開される。諸党派は権力奪取の展望において「どのようにして、どのような革命をやるのか」おのおのの党派を形成しているのであり、形成されたソビエトは、これら諸党派の権力奪取の路線をめぐる党派闘争の場となるのである。だから党がどのような革命を成し遂げるかという問題を、ソビエト運動論によって置き換えることはできない。

階級形成論と党組織論が何故同一たりえないのであろうか。それは共産主義が労働者階級に担われなければならないけれども、労働者階級とは独立した存在であることによる。

階級形成論は党の存在根拠と必要性を導きえても、党形成の論理を導くことはできないのである。勿論、階級形成論なき党派＝日共は、いくら党の力量があっても労働者階級と結合することができないことはいうまでもない。

＜ソビエトの原理的解明―ロシアの教訓＞

ソビエトという概念は、非常に様々な内容で語られている。まずソビエトとは何か、が明きらかにされねばならない。

ソビエトとは何かを明きらかにする為には、まずソビエトの形態とその質を分析しなければならない。そして、この両者を統一した概念としてのソビエトとは革命の型として把える必要がある。そしてわれわれが、ソビエト運動という場合、後で明きらかになるように、現代過渡期世界においては「平時」の階級闘争がソビエト型組織によって闘われるのであり、ソビエト型革命にむけての党の意識性が平時から要請されるのである

ソビエトの形態は、労働者・兵士・農民の地区における評議会であり、その下部には工場占拠、生産管理を行なっている工場委員会と、反乱軍兵士の委員会とが組織されている。

このソビエト型組織の特徴は、労働組合や、議会といった既成の権力組織とは、完全に独立した権力組織であることである。

ソビエトの質は武装した労働者・人民の政治権力であり、コンミューン四原則である。それは、党の指導の下に、既成の政治権力との武装闘争の中で既成のブルジョア政治権力を打倒し、自らの権力を全社会に打ちたてようとする。

それは、プロレタリア政治革命の主要な型の一つであり、日本革命の型はソビエト型である。

中国、キューバ革命は、いずれもソビエト型革命ではない。党はプロレタリア政治革命にとって、普遍的であるが、ソビエト形態は普遍的ではない。だがプロレタリア革命を政治権力の奪取に始り、社会革命をも内包した長期の過程としてみる時、ソビエト形態は普遍的存在である。

ところでわれわれがここで問題としているのは、プロレタリア政治革命＝権力奪取の形態としてのソビエトである。

われわれが、未だブルジョアジー権力を打倒しえない時点においてのソビエトとは、権力奪取の形態として語る以外にない。それ故、ソビエトを工場委員会と規定したり、また、生産管理、労働者権力、自己権力等々を規定することはできない。ソビエトは、プロ独国家の萌芽であり、ブルジョア権力を打倒し、プロレタリアの権力を樹立するための、武装闘争を闘いとる組織である。勿論、プロレタリア革命は単なる政治革命に終るものではなく、社会革命を内包し政治革命であるが故に、ソビエトは、資本家的生産様式を根底から覆えすところの生産管理や、個々の領域における労働者権力を内包するのであって、生産管理や、労働者権力のためにソビエトがあるのではないのである。

＜ソビエト形成の条件―ドイツの教訓＞

では、このようなソビエトは、どのような歴史的条件の下に形成されたであろうか。

ソビエト形態は、議会や、労働組合といった既成の権力組織が発展したものではなくて、それとは独立に、むしろそれらを解体した地点に形成される。歴史的には戦争が敗戦国家を解体した中で自然発生的に形成された。

それは帝国主義段階での階級闘争の内容として把えられねばならない。たとえば、第一次世界大戦前後のドイツの如く、労働組合機関に進出した社会民主党が、帝国主義戦争に協力する中で、労働組合機関は、政府の戦時統制機関に転化（レーニンいうところの日和見主義の社会排外主義への転化）組合機関と社会民主党に対する不満の増大が、ドイツの敗戦以前に存在していたことであり、このような過程の中にレーテ（ソビエト）発生の条件が形成されていったのである。

だからドイツにおけるソビエト形成の条件は、敗戦による国家権力機構の解体と資本家の動揺、そして統制機関に転じた労働組合機構と秩序派として祖国防衛をといた社会民主党からの労働者大衆の離反、等々の諸条件の中で準備されたのである。

労働者階級の即自的団結形態たる労働組合から、階級的団結形態たるソビエトに飛躍するには以上のような激動が必要であったのである。レーニンは帝国主義論の中で、帝国主義段階の階級闘争の質について、日和見主義が戦争を契機に排外主義に転化し、そしてそのことによって革命的潮流が大衆を獲得しうるといったが、労働組合が労働者大衆の日常要求を組織しうる間は、労働者階級の組合とは独自の階級形成は非常に困難であった（せいぜい階級政党の結集であったであろう）

だが労働組合が、戦争の中では統制機関に転化し、その中で、ソビエト型組織が大衆の日常要求の組織者として現われるのである。

ところで、ここに出現したレーテ（ソビエト型組織）は自らを政治権力へと高めることなく、社会民主党とブルジョアジーの同盟によって粉砕され解体された。このことは、ソビエト形態は労働組合運動のゆきづまりの中で自然発生的に形成されるが、それをソビエトへ、即ち、政治権力へと高めるためには権力闘争の勝敗にかかってしまうことである。（この点については、党組織論の領域である [illegible] 結、これはプロレタリア独裁であり、その萌芽たるソビエトであるが、この階級的団結は労働組合という即自的団結の機能マヒ、ないしは解体という過程を通じて実現されていったのである。

＜現代過渡期世界とソビエト運動＞

ところで、帝国主義段階においては、戦争を経る中で全面化したソビエト運動の質が、現代過渡期世界においては、「平時」から発生する条件があることである。このことは、現代過渡期世界の危機が階級闘争の質を規定していることであり、そしてこの過渡期世界の階級闘争の質にいかにかかわるか（現代革命論）が決定的に重要な問題として存在していることである。

この現代過渡期世界の特質は、資本制生産様式の無政府性が生み出す矛盾を、資本制生産様式の諸矛盾を内部から、すなわち、資本制生産様式の解体止揚によって解決することが、帝国主義国家を打倒し、労働者国家を樹立することによって可能であることが、歴史的に証明されたことに端を発している。帝国主義国家を打倒した労働者国家は、国家が経済の内部に経済の組織者として存在することができるのである。にもかかわらず、どのような質をもって、経済 [illegible] ば、帝国主義包囲下の労働者国家は社会主義とは断絶した遅れをもちえないのである。

ところで、周知のように、現代過渡期世界は、米帝国主義の世界支配の体制として存在していた。この米帝の一元的支配が、とりもなおさず、帝国主義の延命をもたらした経済的要因であった。そして米帝一元支配の構造たる反革命と、IMF体制が帝国主義延命の要因となったのである。

IMF体制は、各国帝国主義国家が資本制生産様式の外から経済に介入することを可能にし（インフレによる価値破壊）各国帝国主義は復活していったのである。そして、労働者国家を含めた各国経済の不均等発展が、三ブロックにおける階級闘争の激化をもたらした現段階では、三ブロック階級闘争の結合が問題になってきているのである。われわれが提起した世界党・世界赤軍は、この「結合」を主体的にとらえかえしたことにほかならない。

そこで問題になるのはこの過渡期世界の危機をもたらす階級闘争の質はいかなるものであるかということである。まず、過渡期世界の帝国主義の質は、国家が資本制生産様式の外から経済過程に介入し、（もちろんこの介入は経済＝労働力に対する介入である）、それは、具体的には既成の生産体制や支配体制の解体―再編として進められることである。そしてその介入の特徴は、生産体制に対する介入から支配体制への介入へとその重点が移行していることである。「帝国主義的再編」や「なしくずしファシズム」はこうした現代過渡期世界の帝国主義の特徴を指しているのである。そしてこのような現代過渡期世界の帝国主義の質に規定された階級闘争の質が、ソビエト形態をとった闘争の発生である。

＜中央権力闘争とマッセンスト＞

中央権力闘争とマッセンストはこうしたソビエト運動の時代のわれわれの基本的戦術である。この戦術は、現段階における、日本階級闘争にあっては、反帝統一戦線と階級的労働運動というわれわれのスローガンに具体化される。それは、何か密謀的な呼び名ではなくて、まさしく現段階でのプロレタリアートの階級形成の成熟度に対する質的規定である。

中央権力闘争は、よくいわれるような、闘争のピークにおいて闘われる決戦を指すのではなくソビエト運動の時代の基本的戦術として把えられねばならない。すなわち、労働組合機関のヘゲモニーの下に、議会制民主主義の枠内でのカンパニア闘争（組合主義的議会主義的統一戦線）を解体しつつ、一切の政治闘争を日常的に権力打倒の方向性でもって闘いぬくことに他ならない。

今日の政治闘争は、中央権力闘争という質を内包することによってはじめて、中央における街頭闘争のみならず、各地域における政治闘争も全国政治闘争の一環として闘いぬけるわけであり、組合主義的、議会主義的統一戦線に代わる反帝統一戦線の形成を可能にしてきたのである。

ところで、中央権力闘争の規定がいま問題になっているのは、それがいつの時点で、「権力闘争」に転化するのかということである

機動隊の壁に敗北したから権力闘争ではなくて中央騒乱であり、機動隊の壁を破れれば権力闘争に飛躍するといったことが語られている。また現段階では、中央権力闘争は実体をもたず、中央反政府闘争にすぎないという見解も同盟内部に存在する。

だが、これらの見解の難点は、それがソビエト運動（プロレタリアの階級形成）との関係で提起されていないことである。このことは、ソビエト運動が始まらないと権力闘争に転化しない、といったことではなく、逆に、政治闘争を中央権力闘争として闘いぬく質がソビエト運動を導くものであるが故に、政治闘争を常に権力打倒の権力闘争の観点から提起しなければならないことである。

だから、従来の政治闘争においても、権力奪取のための準備として、蜂起の準備として中央権力闘争、カルチェーラタン等々の戦術が追求されてきたのである。ところで、今日の政治闘争が直面している問題は、中央権力闘争が、権力闘争の領域へ接近していることであり、明らかに、諸階級の対応が、従来のそれとは異なる形でなされていることである。このことに無自覚なものは、今日の階級闘争を闘うことはできない。いま問われているものは、中央権力闘争の新たな展開をかちとる準備である。

そして、中央権力闘争の新たな展開に応えうる党として自らを位置づける中で、戦略的なマッセンストの計画を具体化してゆかねばならない。マッセンストは、労働組合機関とは独自の政治ストであり、質的には、階級労働運動の大衆的闘争形態である。そして、マッセンスト準備の過程はなによりも政治的意志統一が要求される。

なるほど、マッセンスト開始のための自然発生的条件がどれだけ熟しているかは、われわれの計画を具体化する際のひとつの検討に値する課題である。だが、この点に党の視点を置くことはできない。

中央権力闘争が、構造をもたず質をもたない闘争形態であるという規定は誤っている。中央権力闘争は、構造をもたないけれども、質をもった闘争形態であり、マッセンストは、構造をもつことはできても質をもたない闘争形態であるのだ。この関係においては、はじめて両者は、相互媒介関係にあるという規定が生きてくるのである。それは現代過渡期世界の階級闘争の質に媒介されたところの、われわれの戦術の二要因である。

中央権力闘争とマッセンストという戦術は、現代過渡期世界におけるプロレタリアートの階級形成論を踏まえたわれわれの戦術である。従来この戦術は、議会主義的政治闘争と、組合主義的労働運動の中から、反帝統一戦線と階級的労働運動を形成してきた。そして今後問われてくるものは、内戦を闘いぬける政治的統一戦線の型とマッセンストライキの準備なのである。

マッセン・ストライキに関していえば、われわれがそれにとりくむのは、自然発生的に展開される前段階において、それを開始するということである。だから、それは直ちに、マッセン・ストになるのではなくて、プロレタリアートの階級形成論に導かれたところの戦略的なとりくみである。この意味で、われわれが開始するのは、戦略的マッセン・ストと規定することができる。それは、現段階においては、闘争として中央権力闘争と結合されることは期待できない。にもかかわらず、階級闘争の未来（ごく近い）の形態として、われわれはいま準備し闘う必要があるのだ。

＜ソビエト運動の時代の階級闘争の構造＞

われわれは、六五年反戦青年委員会の発足から、10・8羽田闘争の中で日本政治闘争の構造変化を分析してきた。それは議会主義的組合主義的統一戦線にかわる反帝統一戦線（全学連、反戦）の形成であった。今われわれが直面している問題は、ソビエト運動の開始が、この政治闘争の構造変化を一層促進することである。

われわれが、階級形成論の観点よりこの過程を予見するならばこの展望をうることができる。だが問題は、こうした時代の党建設の路線が、何かということであることはいうまでもない。ここでは階級形成論から導きうるいくつかの見通しを明きらかにしたい。

ソビエト運動の開始は、労働組合をはじめ既成の政治社会体制秩序を破壊する。既成の政治社会体制の中から、こうした運動が、形成されるため、ブルジョアジーは既成の社会体制の解体再編を必然化させる。勿論、ソビエト運動開始の条件たる「既成の体制」もブルジョアジーの再編の結果であるが、ソビエト運動開始の段階でブルジョアジーの政策は質的変化を（単なる再編から解体再編へ）もたらす。

（つづく）

獄中からの通信

米田隆介（全学連副委員長）

獄中から全国の同志へ

あらゆる戦線において、その最先頭に立ち、日夜闘い続けている全ての同志諸君！

一月東大闘争を責任をもって最後まで闘い、その闘いの意義故に権力により半年近くもの長期にわたる獄中生活をしいられている一人として全国の同志諸君に固い連帯と熱い友情のあいさつを送ります。

初めに近況をお知らせします。

去年と同様、今年の夏も獄中が避暑地となりそうですが、教対の諸君、それになにより、全国の同志諸君の闘いに励まされ、大変元気に獄中闘争、裁判闘争を闘っています。先月の初めに房内誌記をかちとり、公判資料を作成したり、理論学習を行なって支配者に対する革命的理論の刃を日々研ぎすましています。また裁判の方も、東大闘争の第一回分離公判（明大生十名のグループ）が先月の十八日に予定されていましたが、これは諸君も御存知の通り、全員出廷を拒否し粉砕しました。そして、今月の九日に第二回目が予定されるおり、裁判長は出廷しないなら欠席裁判を強行すると恫喝をかけてきていますが、これに屈することなく断固出廷を拒否し、現在の法体系が支配者の暴力的支配を覆い隠しているイチジクの葉でしかないことを徹底的にバクロするつもりです。

分離裁判粉砕！欠席裁判粉砕！統一裁判をかちとるぞ！

＜反乱を拡大せよ！＞

厚い壁を通して、この独房にも全人民の反乱が野火の如く拡がってゆくのが伝わってきます。

動労の空前のストライキ、全逓の非和解的闘争等、旧来のダラ幹支配を部分的に打ち破り、反戦派労働者を推進力として展開している官公労働者、これとあいまって労働運動の右傾化にクサビを打ち込み、プロレタリア本来の闘いへと労働者本隊を領導せんと、職場、街頭において実力闘争を展開し始めた地区反戦労働者の雄叫びが聞こえてくるようです。

学園反乱を全国各地の大学という大学に飛火させ、巨大な火柱を赤々と燃えあがらせている学生の力強いアジテーションが聞こえてくるようです。

今春の卒業式粉砕闘争、そして4・28闘争で鍛えられ、その若き力、その若き戦線を日々拡大している高校生の若々しい前進の足音が聞こえてくるようです。

6・15闘争の、あの十数万の大衆の結集は、このことが空言でなかったことを証明してくれました。

反乱を拡大せよ！　各戦線で反乱を拡大深化せよ！

そしてその拡大せし反乱を秋期決戦へ！

7月2日

東京拘置所にて

西田篤生（桃山学院大生）

全国の闘う同志諸君！

とりわけ関西の諸君！

「戦旗」を通して知る階級闘争の高揚は、革命論学習にの生命を与えてくれます。百六十日を越える拘留は、コンクリートの密室に革命の熱気を充満させ、今にも爆発しそうです。

階級闘争の歴史上類のない大量起訴、長期拘留をはねかえしてくれるのは、何よりも大阪の地でスターリニスト・統・社同教授会解体を闘っている、わが桃山学院大全共闘の闘いです。6・14政治集会や泊り込み等、闘う人民の陣地となっていることです。多くの諸君は、反日共の教授会なら闘いやすい――と思うかも知れません。

しかし彼らこそ真のスターリストであり、彼らこそ階級闘争のイチヂクの葉なのだ！

破防法という権力の弾圧にうろたえている彼らを全共闘の諸君粉砕してくれ！部分的改良では資本の論理を粉砕できないのだ。

共産同―共青―社学同の党的ヘゲモニーの貫徹が唯一闘争を領導し、歴史を大きく左転換させることができるのだ。

聞くところによれば、関大でも闘いの烽火が昇ったとか。

関大を西の日大に！

大阪府学連の赤ヘルで全大阪をうめつくせ！

われわれはブルジョア法論理をズタズタに分断しぬき、統一公判を獲得するだろう。

大学立法粉砕！

分割公判粉砕！

六九年七月一日

（東拘在監）

獄中でプロレタリア戦士に

東京拘置所在監　吉田文明

前略

「戦旗」のサシイレありがとうございます。

四・二八闘争をノン・セクトとして闘った私が、拘留生活で最も痛感したことは、この厳しい階級情勢をプロレタリア革命に向けて旗手として闘いぬくには、それに耐えうるだけの理論武装をしなければならないということです。

これまでほとんど「機関紙」を読んだことのない私にとって、この「戦旗」を読んだとき、自分が漠然と考えていたことが明瞭に、しかも理論的に「導きの星」のように示されているようでした。

日本階級闘争の戦士として闘いぬく決意がますますうち固まったような気がしました。

今後ともよろしくお願いします

共産主義

社会主義学生同盟
全国委員会機関誌
理論戦線
300円（〒70円）
8号　発売中